繪本漢楚軍談

八

へ13
3565
8

門 へ 13
號 3565
卷 8

早稲田大學図書館
昭和 34.6.3 購入
藏書

補刻 正本漢楚軍談初輯巻之八

東武 鵬鶴貞 高纂述

第十八回 項伯烏張良説項羽

項羽急ぎ叔父を見え叔父何処へ出られぞと問へば項伯回答て我舊き友韓國の張子房と呼者今沛公の陣に在我と親く好あれば今夜亡人事を最不便惜故密に彼と落えんと自行て説示しふ幸中て沛公此関中に入てより行ふ処を能聞り沛公素より別意なく先に大将を遣して固関門を守りて他の盗賊を防ぐ魯公を拒ぐふあらざる由且財寶も美人とも封じて外に動さず専魯公の来るを待放ふ為ぞと云某想ふ沛公の先咸陽を破らば我輩ひとで斯容易不血刃関中へ進み入業能べきぞ此沛公の功ゆへ其過失を我いひ云ば其を小人の言ふよりて罪を

人を害し功を妬が如くまた人夫不義と曰でやハ沛公飛鳥ハ自ら罪を謝せんと曰れり。将軍怒を止められ沛公を能饗応て大義を失ひ給ふと頻ふ諫しうければ項羽須臾案ぜーの我今叔父の言を守ふ沛公ふ罪可無然ふ兵を動し之を討ば怒らくハ天下の人ふ笑はれるんと云ば范増又復て我沛公を殺さんと勸むるハ外るべ沛公関ふ入りてより法を約して三章とし人の心を懐けるハ其志必ずーも天下を取んと謀まるあり。今是を不除ハ後大ある害ひらん。夫を不悟して項老い飽まで張良ふ欺まれ小云るれど理ふ不當ひらを聞うり項伯ハ色を正しく為て范増ふ對ひ先生沛公を殺さんとせば別ふ計畧も有べきふ何とて夜半ふ刼し襲ひ伐んとて丈ふて是大丈夫の本意るるぞと云ば項羽ハ実ふもと同じ項伯の諫ふ従ひ沛公を伐事を止うければ范増諫て曰けるハ今沛公を殺さずんば吾屬皆擒とらん。

君其時ふ至りてハ腑を噬とも甲斐あるまじ。我三人條の計策あり。先第一ふハ沛公を此陣中ふ招うせ彼ぞまるを伺ふて君自ら出迎ひ彼ぞ関ふ入てより後の罪を數て荅へ。剣を拔て斬ふ見を上の計とし又第二ふハ君自ら迎る事能ハ油幕の影ふ屈強の兵二百餘を藏置彼ぞ座席ふ入て後某時刻を見合せて佩所の玉玦を振揺して合圖せん其時兵を喚出し忽殺ーふ。此を中の計とし又第三ふハ沛公ふ酒を強て醉しめつ彼ぞ禮を失ひ即殺ーふべ。此ハ最下の計なり。此三の中ふ従ひて彼を殺さ給ひね。と再三再四諫まハ項羽乃點頭て三ヶ條の計皆我ふ合うり。早く沛公を招んと。諸大將ふ用意させ書簡を贈り招くまで使ハ急ぎて覇上ふ到れば沛公の陣ふ到れば沛公書を受て披見其書ふ曰

曾公項籍致書沛公帳下。初與公受懷王約共伐

暴秦以安黎庶幸今天兵西下子嬰來服關中収附嬴氏族滅神人咸悅四海稱慶宜陳宴樂以賀亡秦公爲元動禮請端席唯乞早臨以倡群僚不宣

沛公は見て諸将を聚め項羽は我を招き寄鴻門の陣ふ舎せむ。此舎甚だ危しなり。皆范増が計畧ぞ我を殺さの方便ぞ。若輕々しく行時は陷坑ふ落入ぬん如何ぞ。如何ぞ。と問へば。蕭何答て曰る。項羽は其勢強大ぞ。中々これふ敵し難し。不如友間を調へて。辯舌の者を遣され関中の地を彼ふ與へ君は別ふ一郡を乞求られ身を安く軍馬を整へ時を待計を成へ鄭生是を打聞て此義宜躬て妙なり。我願くは項羽ふ説んと云を張良ぞと止め否々此義善まず。子嬰平王ふ従へ臨潼の舎ふ赴き。十八ケ國の諸侯たち。皆悉尊仰し。蘭相如は秦ふ使して。璧を全して趙ふ回れり。某不才なりとは。願くは君ふ従ひて鴻門の舎ふ赴ぶ。范増ふ其計を用る事を沛ぶ。こしめ項羽ふも其勇猛を施事を為しめ。張ふ計謀候へと云が沛公大ふ喜び只先生を頼のみ。我不行べ叶まじ。と友間を調へ。飛鳥早く舎ふ赴んと畏答て使を帰されけり。亦鴻門ふは沛公が明日の舎又ふ難し。我三ケ條の計。君よく忘れ給へ。と再諫されば。項羽許諾一々ふ飛鳥の用意を成しめ丁公雍齒ふ門を守らせ。嚴歩八を正しめ酒宴を設け待居う。次の日早朝ふ沛公は百餘騎を相従へ張良。樊噲。靳歙。紀信。滕公。五人の大將諸共ふ馬を早めて鴻門の。こゑ陣前ふ来りしが心疑ひ不安。馬を留て張良ふ對ひ今日

の命に十分に心を怖れて疑ひけれ。我恐くは害に遇んか。先生如何計議
るぞ張良答て申さ様は心安く思召。某自計畧あり。時に臨変
に應じ。これを施し行ふべし。昨夜密に申せし事必ず忘れ給ひそと。項羽
問ひて有んや。答へて曰く。自無事あるべしと語りたる。鴻門に近付べ向
よりして一隊の勢。刀鋒霜の如くにして出る。真先なる大将
いとれ六安の英布なり。某魯公の命を受て半途に出て沛公を迎ま
つると。馬より下り。禮を施し先驅まして。鴻門の陣に赴きぬ。沛公已に
轅門に進ませば。陣平に道の傍に出迎へ相導きて内に入。沛公進み見
ずに。旗幟を聯ね戈戟を立列し。武具を双べ金を鳴し鼓を打。十
分堅固に備へれば。須臾此処に駐りて。張良を召宣ふに今此中の体を
見るに恰も戦場の如くなり。全酒宴の会に似ず。我此内へ入ぬるぞ。

張良説て曰けるに。君此處に到ぬ。ひて進むに理あり。退くに甚屈すと云ふ
べし。一足にも回ぬば。其計畧に落入ん。須臾此処に待ぬ。我内の様を見
て参ると。進んで内へ入んとすれば。丁公雉齒ぢ之を許さず。張良礼を施
して。我に乃ち韓人ぞ。假に沛公に従へる。張良と云者あり。只今魯
公に見えと。出来れりと報じぬ。丁公心沼内に入。項羽に向ひ云けるに。今
陣門の道ぞ。假に沛公に従へる韓の張良と申者。君に見えん事
を乞ふ。奈何して宜しからんと。告ぬ。項羽いこれを怪しみ。假に従ふとも
何事ぞ。范増進みて曰けるに。此乃ち韓國の張子房と云者ぞ。五世
まで韓に相ふ。世家の者なるが。智謀極て深かりき。沛公秦に向
時彼従つて。これを扶く。今此に来りしに。揣摩の辯を巧み。君に説ん
と為者なり。先此者を斬時に沛公の臂を絶が如し。小去ぬと勧れい。

鴻門の會劔の舞の圖

項伯これを打聞て急ぎ留めて云けるゝ無用たるべし。魯公関ふ入るひて天下の心を懐けられ賢徳の人を用ひずゝ王業何とそ成ぬべき。公を如何ゆゑ子房程の賢ある人を故もなく殺んとゝ為ゑふ況て某張良と舊好も有れば其才徳を愛ゑん我此者を説勸め御方ふ帰服為しめ豈軽々敷他を失ふを可とせんや。と云ば項羽ゝ最もと同ど丁公をして張良を招りむ張良ゝ内ふ入ゝ禮を為し項羽が甲冑を纏身剣を横ゝ之座せを見て之ふ向ひ云けるゝ臣承る古昔より明主の天下を治るゝ徳を輝して兵を揚げ世を御まるゝ徳ふ在此故ふ世の古言ゆも大賈ゝ藏して露さず豪富ゝ斂て後ぎと勢強も弱を示し暴所為を為ざるゝ皆老成の遠慮ゆゑ識見ゑるき所為ゑり。今日魯公ゝ鴻門ふ大いふ酒宴を設

けられ諸侯を會し歌と聞必ず笙歌を奏せられ賓主諸共楽みて生民を治ひる道を終し秦の滅び慶を述終日歡び楽ゑんと推量しふ不圖甲冑の勇士ゑ四面を守り鎗刀ゝ日ふ耀き金鼓ゝ天ふ喧ゑ。ふ公ゝ斯動静を見そ人の心安々ゑ皆避去の思ひゑり況て魯公ゝ九ゑ章邯と戦ひて天下恐服する事誰ゑ之を知ざらん強ふ儆を用ひずして能自ゑら強して勇を示を用ぎして又自ゑら勇ゑり公を如何ゑ今更ふ箇様猛勢を張ひて事新しく示さゑぞ今日此會ふ聚ゑる諸侯も恐れて容易ゝ陣門ふ入事を得ず願ゑゝ察しゑよゑと理非明白ふ説示せゝ項羽ゝ一々其言の理あるを守て恥らひて甲冑を脱武士を陣の後へ退けつ金鼓をも止させそ自らも鎧を却かへ衣裳を改め威儀整へ諸侯を迎へ入ると曰ゝ丁公雍齒を命を承門を開て迎

ける。相従ふ者共をば遊り止て一人も内へハ更ふ入ざりけり。尓て沛公ハ其昔日項羽と約して兄弟たる故有を以て座上ふ進階下ふ立て謹で礼を施しひを項羽ハ色を正くして足下ふ三の罪こそあれ之を知るや如何ぞや。沛公これを聞ひ某ハ素泗上の亭の長で有しを諸人ふ推れて兵を引具しつ。尓て将軍の麾下ふ属進退ふ命を待自ら放ふせぞ。昔日臣ハ将軍と二隊ふ分て我〻ハ河南ふ戦ひ君ハ河北ふ戦ひ臣ハ何ぞ尓故を以て思ひ寄ぬ君より先へ関ふ入君が来るを待るのと言穏便ふぞ答られけり。

第十九回　范増沛公鴻門烏殺

項羽ハ是をうち聞て足下関ふ入てより降王子嬰を招き自これを放ち是其罪の一なり。民の心を懐んと秦の法度を改めて法ふ三章ふ約したる。是其罪の二なり。又大将を指向て函谷関を守しめ諸侯の兵を拒ち是其罪の三なり。此三の罪有ぬと云ふ。沛公答て曰ふ臣一言して心中の赤心を顕さん秦王子嬰執刀極り頸を延て降参せり。若速ふ殺しなば自ら擅ふせしと云べし。斬ぬ捨置斬も放も将軍の隨意〻〻せんと思ふのみ。又秦の法酷暴ふて百姓水火の中ふ在日夜ふ救ひを待ふ我斯法を改めて魚鱗の徳を顕せり。此故ふ民喜て前驅の勢ひ斯あれば後より来る王の軍ハ如何ふや民を恵まれんと足を翹て頸を延し君の軍を相待り。又大将を遣て函谷関を固しハ全く諸侯を拒ふのみ。秦の滅亡の起らんと他の盗賊の非常と正を為の戒めなり。今幸ふ将軍ふ見へまゐらせて某が誠実を述まゐらせ侍る。比日少ふ小人の中言有て将軍と臣とふ郤を入

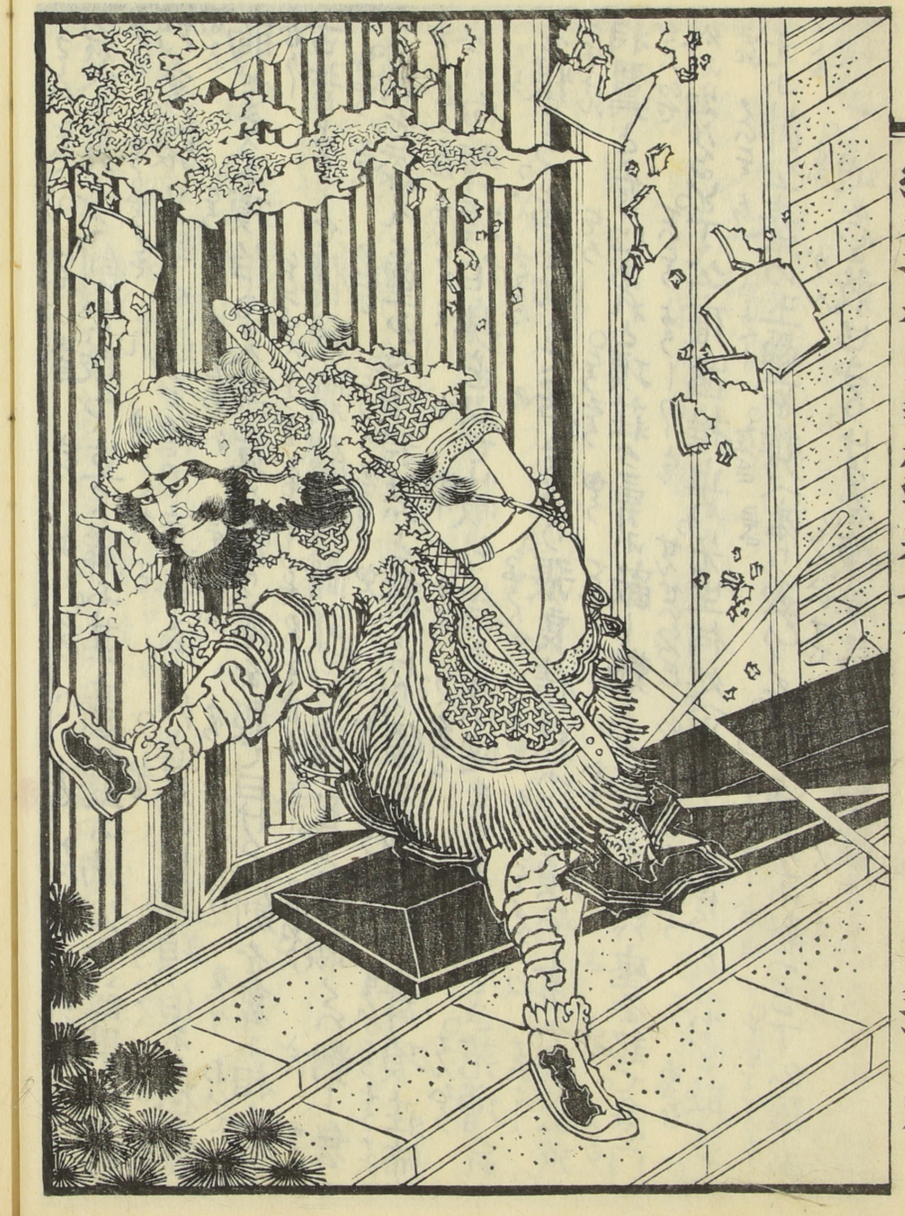
んとを願くは昔日兄弟の盟を思ひ出されて臣が心を憐れ實の否とを知給へと綜細密に述られば項羽は極て剛なれど心の淺き者なれば此言を少しも心の疑ひ皆解て自ら座席を清めん我は素より足下と疑ふ心非るを足下の左司馬曹無傷書簡を送りて訴へたり我此故に疑ひしが只今足下の言を少尓て喜に堪ずと云へば沛公立て再拜去恩を謝して退る。諸侯は彼是揖讓して酒宴の席も定まり范増張良項伯も其傍に列座せり。時に伶人樂を奏して已に酒宴も始まり范増は先第一の計畧成ぬを患ひさり。暫有て項羽が体を左見右見れば沛公を殺さ氣色も有ずして油幕の陰の兵も未動さるを見ければ今は第二の計を行ふ時刻と兼てより約束されば玉玦を三度までも動して眄ふ項羽は思ふに沛公謙遜柔和を

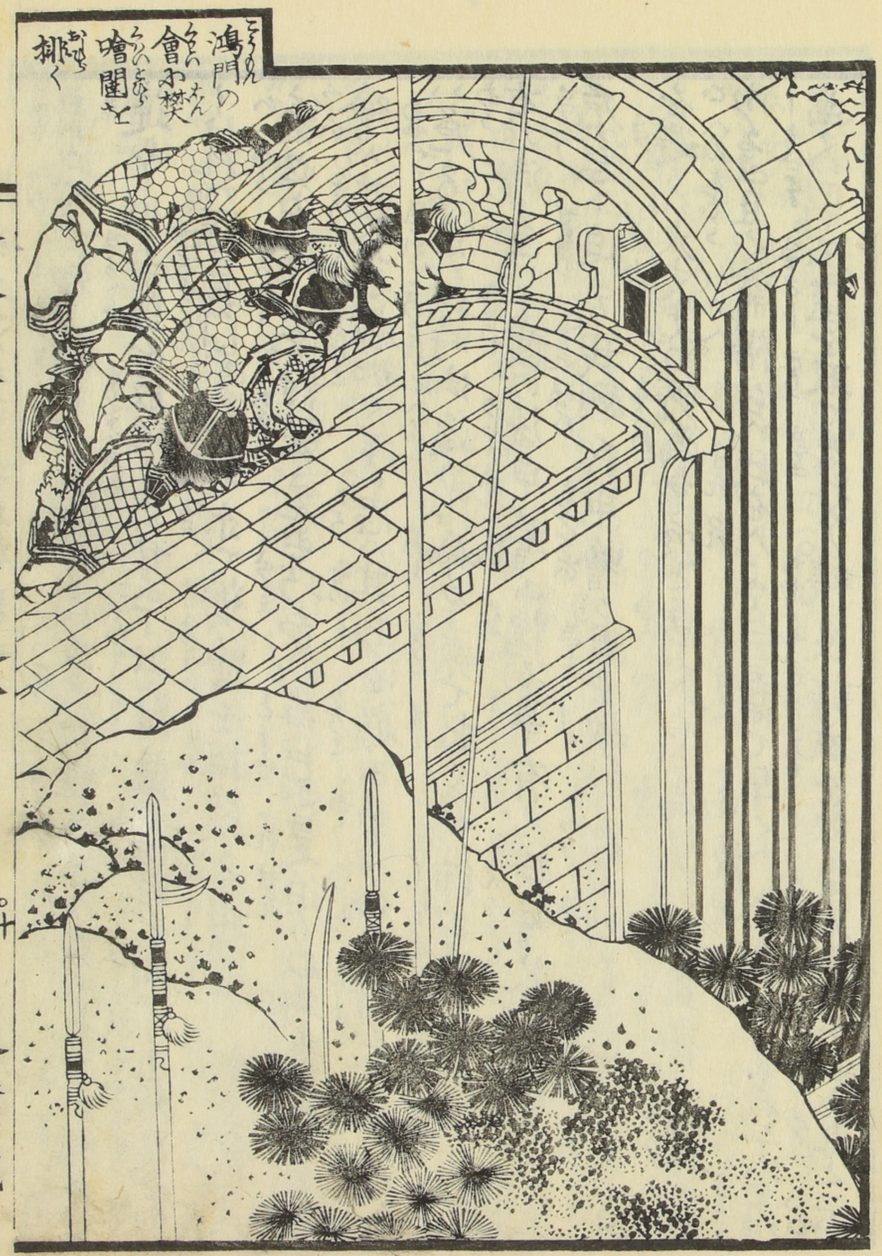
用立人は有されば生て置とも何程の事や有べきと其上は若此會に此人を殺さば諸侯は笑まんと遂に之をも為されば范増第二の計又成ざるに悶章々。第三番の計畧を。醉しめ禮を失なはしめ事兼て陳平に曰含なる事なれば目を動して意を知しむ陳平早くも悟て大杯を擎て出沛公の前に到れば隆準にして龍顔に天日の表有故是尋常の人にあらず他日必ず帝王の尊極に居ぬべし。今范増が後へば反て天に逆ふと思ひふければ是よりして項羽に酔い多くして沛公に酬い少なきに沛公早其意を悟り。酒酣に及べども禮を失ひ玉ゑれば范増いまは謀る三ケ條皆不成ば。座を起て外に出り長嘆して云けるは今日沛公を殺さざい後大いなる害あらん。よく奈べ勇力の者に命じ只一討に殺さんと其名を見遣るに陣の後に一人の

大将剣を彈じて歌を謡ふ其歌を聞つるふ。

我有百寶劍。出自崑崙頂。照人如照面。切鉄如切泥。兩邊霜凛々。匣上風凄々。寄與諸公子。何日得相見。

范増これを聞て心大ふ喜びつ。急ぎ其人を召見れば乃ち項羽が一族の項荘と云る男士なり。これふ低語曰ける。魚昌公其性剛毅中ふ決断無人なり。今日の會專ふ彼沛公を殺え。と計を設つ。三度條を約せ。ふ今ふ至て其義なし。今日沛公を殺し得ざ。後大なる害有ん。是難得の時なるべ。御邊劍舞し座ふ入て。一討ふ斬殺し。あば。是莫大の功なるん。項荘許諾し座ふ入て。左右ふ揖して曰ける。ふ。尓て軍中の樂ま。さまでの興も候へ。某只今劍を舞し。諸君の笑ふ具ん。と劍を拔て立て舞ふ。其意ハ既ふ沛公を。討果ま。巧なり。張良早く這を悟て。直事なるべ。と思ひければ。項伯ふ急度眦せまるふ項伯も又其意を悟り。座を起て曰ける。劍を舞ふ相手。古昔よりして傳説霜鋒交錯可以奪目。と我願くハ對し舞て。興を添ん。と望ふ。項羽然と許しけり。頓て両人對し舞項荘沛公ふ向時ハ項伯身を以て蔽ひ程ふ。樂圖まで事無き范増これを恨まで。歯を切て居まけり。張良倩思ふ様項伯常ふ沛公ふ。羽翼と成る心あれど項荘ゞ男ふ敵し難。と思ひふければ座を起て急門外ふ出るを。丁公雍歯推止め。先生何処へ出ふ。張良これ答を欺て。先ふ沛公秦の玉璽を携へ来り。ふ。丁公雍歯疑ひて。通まを敢ざりけるを陳平已ふ沛公ふ服する心有けるを張




鴻門の會に樊噲闖を排く

良が心を知り後より〳〵て曰けるハ魯公ハ性急ふれ在るゞ早く張良を通らめ玉璽を取返らせよ。丁公雍齒名これを聞て了ふ張良を出しけれハ張良門を急出て尓て樊噲を招く。今項莊が劍を舞ハ其意必ず沛公を討果さんず巧あり。事已ふ是迫り如御名古昔の申噲が莊公を救如くせよ忠ハ其身を顧ず勇ハ命を惜ず。と今沛公ハ危り。爾が此時御迫り命を棄て救たゞへハ沛公必ず免れ難し。然有ハ御名ハ千載の後申噲ふ愧る事有ん樊噲答て曰けるハ今夫危急ふ迫り我願くハ申噲が君を救ひ忠ふ効さん危きを見て身を避るハ大丈夫の所為ゝ〳〵と急ふ入んと為けれハ張良止めて曰けるハ。れ名と且く需滞られ我を入よと云棄て早く門内ふ入んとまれど丁公雍齒又問て玉璽を取て来れるゝ張良詐衣をかえ玉璽乃ち此ふ在と云

て此處を馳通り。舊の処へ回りて〳〵ふ項莊項伯尚舞居ゝり。尓て樊噲ハ鉄の盾を小腋ふ指挾て。劍を帯して陣門の前ふ至りて大音あげ。今日此會ふ從ふ者早朝より来りて外ふあれど一滴の酒も賜らず。我此故ふ魯公ふ見え酒をたまへんと進みけれハ丁公雍齒これを聞曲者ありて通さゞると急ふ門を閉けるを樊噲い大きふ怒力を出し門の閂を推ふ陣門忽ち地ふ倒れ番卒これふ推撃れ殺さる者數あれど樊噲直ちふ中ふ入劍を以て油幕を挑げ項羽が前ふ立けるハ怒の眦逆ふ烈衣頭の髪い上指項羽ハこれを見て劍と按り跽きて曰けるハ客ハ何為者ぞ張良答て是い此沛公の參乗ゝ樊噲と云者ありき項羽ハ異ふ問て曰今何故ふ来れるゞ樊噲答て今日魯公の會せ〳〵秦の滅し慶て酒宴を設け上下とゝ

酒を賜とて与る然れども。唯樊噲は早朝より門の外に在て。已に午時
も及べども。且一滴の酒を呑ず。腹中飢渇甚だし。此故に我君に見え
て。乞求めん為来たり。項羽へ是を壮士とし。頓て左右に命せらるる
一斗を盛る巵に酒を酌て賜ふに。樊噲は十分に引受只一飲に飲
盡す項羽復び左右に命じ。一の生しき彘の肩を。與へられば樊噲は
持る盾を地に覆ひ彘の肩を上に加。劍を拔て切喰ふ。項羽これを
見て云るは。壮士能復飲るか乎。樊噲答て曰るは。臣死をだにも且不避
危酒安んぞ足辭せ。秦王虎狼の心あり。亡ぶる人を殺せ。天下
皆叛に之。懐王諸将と約を為す。先早く秦を破る。咸陽に入者を
以て王と為んと宣る。今沛公は秦を破り。咸陽宮に入れど毫毛
も私に近る所有ざりき。且宮室を封て置軍を霸上へ還さ

まで。以て沛公の来るを待。又大将を遣して関門を守らしむ。他の盜
の出入と非常の事に備へしのみ。沛公労苦して。功の高は斯ぞ
かし。又に封侯の賞あるべ。細語を聽れて有功人を誅せんとす。此亡秦
の續る耳。窮に魚肉公の為に取る項羽いとれに応ぜしむ。先樊噲を
坐しめつ。猶盃の数積て。其俄醉て臥とする。沛公は厠へ行とす。
樊噲を招て。此処を出んと為とす。如何
せんと宣へば樊噲答て曰ける。大行は不顧細謹。大禮は不辭小讓
べし。如今人は刀俎とし。我等は魚肉に異ならず。何の辭を為んと諫
に沛公實もとそ只張良を殘し。樊噲。靳歙。夏侯嬰紀信
等を従へて。山際の細道より。馬を早めて回られけり。爾て范増は計一も
成難べき心の中。悶苦しみ陣の後に長嘆して居とす。沛公は

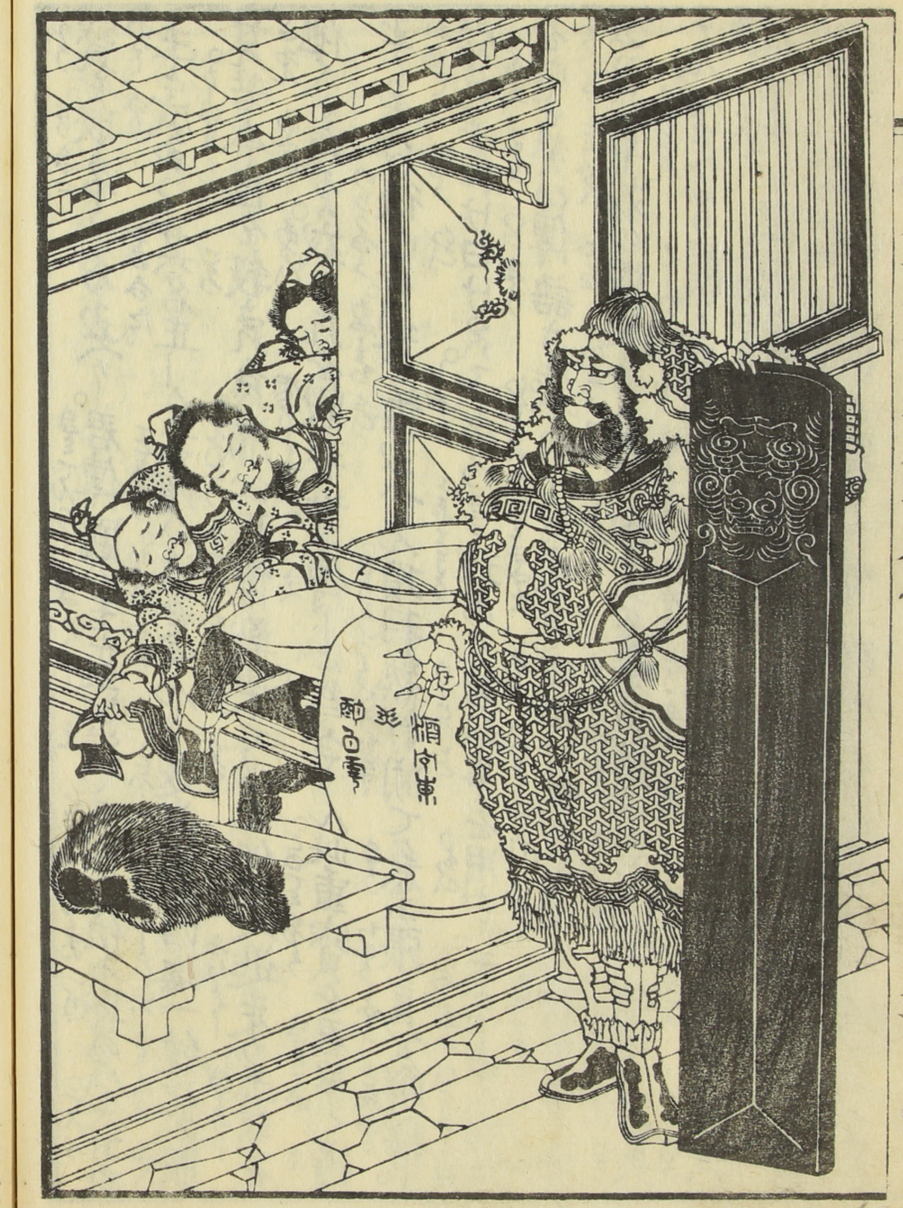
故なく回さけり。

第二十回　携玉寶張良謀項羽

介程ふ張良へ劉沛公を陣門の外まで送り出して一人留居
たりしが。誰とも知ず陣の後ふ戟を彈じて謠ひる。其詞に曰
ふ。飢熊下山掲石見蟻呑に之入喉不妨嗟嘆而出危
乎哉危乎哉　張良これを打聞て。庸人なりと思ひて。密ふ之
を伺ふに其顔色い黄白ゆえ又其神氣清爽なる最長高壯士ゴ。
手ふ長戟提へて。欺笑ふてゼ立たりける。張良へ此如何なる人ぞと其
姓名を尋るふ其人更ふ言いらず。范増空費心。張良能識王
今日脱鴻門　他年鎮寰宇。と謠ひて起ければ張良大ふ驚
ぎて。是世ふ絶たる賢士なり。如何も為て招寄御方ふ為んと思へども。

其姓名を知ざれば力及ず止ふけり。其後之を吟ずるふ項羽ゴ執戟郎
たりし。韓信と云者ありき。扨須臾して中陣ふ項羽い酒も醒ければ沛
公如何と尋るふ張良進て曰けるい沛公酒を過されて座ふる事だふ
能ず祓へ。適ふ大王ふ暇をまうし。霸上の陣ふ面りたゆ。故以て我を留置
今日の恩を謝いしむ。項羽い之を打聞て大きふ怒て曰けるい沛公我ふ暇
をとりしを。心の侭ふ出去ゆ。汝如何ぞ言を飾。欺んとい欲ふるぞ。范増項羽
ゴ怒を見て。心大きふ喜びて。急ふ見えて曰けるい沛公対い柔和なれど心の
内い奸雄の。計畧最ヨヌりき。尓ゴ老臣ゴ不條の。計策を勸ゴ。君ゆい
之を用ひ給ずゆ。今軽々ふく心の侭ふ面去ゆい必せられ。君を侮る所以ふ
是其本い張良ゴ所為ふ有ゴ必ずも。是を信とゆふ項羽い之を
打聞て。弥怒を発して。左右の武士ふ命ぜられ。斬て無よと告けるゴ。

張良顔色を正くして大王必ず斯許ふ怒を發し給ふんや。臣今假ふ沛公を投げ従ふ而已ゆて。本韓國の宰相なり。沛公爭て我為ふ實の君と云ふ。公ハ臣又何故ふ沛公の為ふ詐て君を欺く事をせん。況てや君の威勢ハ天ヵ下をも震る。誰か惧服ざらん。君必ず沛公を殺ーむとん事をるべ。学を反らるも最事もるべ易るべ。ふるを何ぞ酒宴と。欺き寄て殺さえと拙き方便を為ふ凡人を殺ふ其道を以て為されば後の誹謗を免ず。今欺ひき殺さえ天ヵ下の人これを聞大王必ず沛公ふ勝ると能ざる故ふ鴻門の會と詐りて出ー拔殺ーむ。と云觸さんハ必定なり。然ハ有んや天ヵ下と。假令容易得ずとも。名正ーくて言順ふ聖人の教ふ悖りて千載の笑と成ずん只願くハ怒を止られ臣を覇上の陣ふ回ー彼傳國の玉璽と共ふ富る秦の重寶を取来ーめ給へ。君傳國の玉璽を得て天子の位ふ即ゆ天下の主と成ぬべ。其名正ーく言順ひ近を安んず遠きを撫四海一統化ふ服せ若今臣を殺されるバ沛公恐懼戦栗て必ず他國へ逃走り玉璽を他人ふ與るか或ハこれを毀弃世ふ傳ーと為るか。此重寶を君早く得ずんばまんバ後必ず過を悔ひらん項羽熟打聞て急ふ張良を解釋。顔色を和げ曰ける子房の言理あり。若此事を用ずハ天ヵ下の人我性を必ず笑ひ傳語さえ今此干戈定りて四海一統我ふ帰き推量るふ沛公ハ只草茨の如のと爭ふ我ふ敵まべき若范増が言を聽バ殆機會を失ん。汝是より覇上ふ回り玉璽を早く取来り我ふ献せよ怠るな若我命ふ背きなバ我百萬の兵を以て覇上の陣ふ打向ひ微塵ふ為んと云ひれば張良拜謝ー相別き覇上の陣へ馳回り右の趣告げれば沛公大きふ


項羽酒宴
酔臥帳

張良
王印至寶を
項羽に
呈進せ

喜びて。今日の危き宴會は若先生の補助るゝに必ず免れ難しとそ。彼田忠為こうけゝ曹ゝ無傷と引出し。之が頸をそ刎さるゝ張良復て曰けゝは項羽は先ゝ我君の辭せゝ面白ひしを大きゝ怒言りて急ゝ伐んと議しけゝを臣欺きて漸くゝ彼が怒を止さゝ玉玉并ゝ重宝を早く取れと命じたり。之迭ゝ叶ふまじ。沛公眉根を顰ら玉玉璽は乃ち傳國の重き寶ゝ有れば必ず人ゝ與ふまじ張良悟して曰けるは凡そ天下を得るのは德ゝ有て寶ゝあらゞ君若玉璽と吝れて項羽ゝ與ひ給へ。今合戰ゝ及び難し然有んゝ彼が手ゝ必ず擒と成ん不如需ゝ須そ某明日携へ行項羽ゝ與候ん尓せば彼は喜びて凡事みな成りと。果して遠圖を忘るべ。其時ゝこそ我君は從容として大事を圖らん此は所謂小を捨大を取の術なりきと說きてひれば沛公は最と悟りて許されば次の日張良壯衣ひ玉璽珍宝を携へて又鴻門の陣ゝ行沛公昨日酒を過し。今日猶病て臥てあり。故以て臣ゝ命ぜられ謹み禮を成しむと曰て携へ來たる玉璽珍寶取出て項羽が前ゝ捧ぎば項羽は急ぎ取寄て案の上ゝ雙つ。左見右見ゝ温潤の光隈て一点の瑕さへ無て比類なき天下の重宝なりしに限無き喜びて打返し又操返し。扨其中より照生の玉斗と云るを取出。此は真ゝ珍寶なり。先生これを玩弄べと范增ゝ與へれば范增玉斗をゝ取て其侈地上ゝ抛棄つ。劍を拔て撞碎て咲堅豎子共ゝ謀ゝ足ず項王の天下を奪者は必ず沛公為べ也吾屬皆沛公が虜と成んは必定なり。今夫此物の寶玉何の用ゆ立んと云ば項羽怒て曰けゝは夫臣為れ道と云は君食ものを賜れば必ずまづ之を嘗君生ものを賜れば必ず之を

畜とす。況んや希有なる寶玉をや。我今沛に賜ひぬ。忽ち碎くは如何なる理ぞ。范增顔色を正くして之に荅て曰けるは。齊の威王の魏の惠王の希世なる寶とせし照車の珠を恥られて。此珠車を照すとも百乘に過べらんや。況んや賢臣四人有千里の外を照すと云り。是は古人の賢を重んで寶とする道なりけり。今老臣が重むるは只沛公が元首なり。乃ち天下の重寶なれ。君張良に惑されて老夫が言を聽ずして。遂に機會を失ひぬ。空く無用の玩物を受て喜び忍ぶべきや。小が老夫が心中に感激する事有故に。如斯に數を碎けり。敢てや君の賜物を輕んずる事候はん。項羽復て曰けるは。素沛公は儒弱にして。大事を成すこと能はず。我是を以て心中に左而已深く患ひぜと事もなげなる顔色を打守りつゝ范增は昔は鄧侯楚の文王を殺し得ずして後遂に楚國は鄧を滅せり。君沛公を殺さば沛公後に必

ずや君と天下を爭はん。今沛公を放ち龍を海へ歸すが如く。虎を山へ入るに似たり。再び之を拘まく欲すとも能得乎。張良問て進み出て足下は老將軍何事と斯まで深く執るぞ。魚目公の勢強大なるを天下に敵なうらん。其膂力能鼎を扛。其猛勢能山を拔。只八千の子弟を降し。又九〻の章邯を戰こ破りぬ。故諸國の王侯膝行して面を見上る者も無く。惴恐れ服さぬや。老將軍の云れる。鄧侯なんどの非車と雲泥万里の違而已。天地の如く懸隔せり。日を同うして云るべき。況てや沛公は關に入凡そ事皆遲滯して。自ら擅るべき。專ら君の來るを待て。これを以て推量に其大いなる志無らん事は顯然なり。其を又之を楚の文王に比べは甚過たり。如何や思召るゝと。說れて項羽は點頭つ。沛公は実儒弱なる物の用ゆに立難し。焉ぞ能大事をなさん。我まゝ深く患とせ。今張良が云ところ皆

悉く理あり。沛公を棄今こゝろ〳〵我ふ事て事を議せよ。范増諫て曰け
る。大王適ふ張良を殺さんと迫むるはいかや。今又彼が巧言ふ欺れ掩れ
て。用て左右ふ置む。大なる害有ぬべし。項羽笑て曰けるハ老師が遠慮も
宜されど。又甚だ過たる哉。今張良ハ一人の儒者我傍ふ在とても何ふ事ら
我を欺き得ん。范増復た曰けるハ若明らふ害ふ者ハ猶能これを防べし。暗
ふ損ふ者ハ之を測ると難し。君能察し玉へ。項羽顔色整く。我
是匣ふ寶剣あり。觸抵時ハ必ず斬。誰か我ふ當るべき張良如何と誇々。
遂ふ忠ある范増が諫を用ざりければ張良暗ふ欺き失ひ此ころ須臾鴻門の
項羽が陣ふ卯刻そ。恭山ふ在が如し。嗚呼張良の大膽哉。七國ふ爭戰の昔より。秦
と漢楚の今ふ至りて。誰か能子房ふ及ぶ的あらんや。實ふ稀代の大丈夫と云べ
○貞高評して云

丈書を看官。巻中の人物ふ。幸と不幸の有と心付者稀
なり。抑沛公の臣下。忠良何ぞも勝劣る。但し項羽の強勢
と。范増の大謀を折き。漢の天下を與せ者ハ誰ぞ。是則儒臣
酈生なるべし。故如何とならば酈生始て沛公ふ隨ひ早くも
陳留の地を勸め。陳同を降せ。支其功大いなり。此時
沛公ハ大軍を引率れども。未根城とする地なし。彭城の要
害ありとなれども。這ハ項羽の本城ふ等し。又豐沛の地ハ狹
くして。大軍の根とし難し。酈生速ふ是を考へて。陳留の
衢地を取て。沛公の根を堅くせ。衢地とハ何ぞや。則四道ふ
通ずる所を云。諸國ふ通路ある地と知るべし。斯て其身ハ
文学の博士なれども。國外の謀の及ざると思ひ。身を矜らず。

まて人を拒む支ふく。沛公の為ふ張良を進しい正ふ漢家四百年の大業を發せ至功忠良の臣と賞誉せん看官深く心を著て。小より大の進むを思ひ人を用ゆの一助主君ふる人の用心とるべき欤。

尓も項羽ハ鴻門ゆ。威風らゆく振ひ。張子房ふ欺れ劉沛公を殺さん。と思ふ心の無りしば范増数諫れど更ふ聞を用ひず。且張良を留置這と用て事と議し。諸大将を集つ。此等ふ向ひ曰けるハ関中已ふ平定し。王室ハ我ふ屬されとも。秦王子嬰尚ひまゐ。我陣中ふ来ら。彼ハ覇上の陣へ書を送り早く子嬰を召捕て。其頭を刎ば天ぶ下ハ自ら我ふ帰ぶべし。と使を覇上へ遣さゆ。沛公書を得て披き見る其書ふ曰。

我與足下伐暴秦以除黔首塗炭今吾入関已十餘月矣三世子嬰久不來見惟足下占恡不發意有他圖我統大軍與足下試武覇上足下以為何如

沛公これを見了て。諸臣ふ向て宣ふ。項羽ハ已ふ約よ違ひ関中ふ王為んとす。此故ふ書簡を以て秦王子嬰を招寄已ぶ陣ふ降らしむ。是ハ諸侯の口を塞ぐ已秦を破りし。と普く知せん為ふ此ふ此を不敢ば恐らくハ合戦ふ及ぶ歟。若許容ふ懐王の約を負て王たらん。是を如何ぐ計ふ歟。諸大将皆曰けるハ項羽勢強大ゆ。これふ敵ふると難し。子嬰を送て彼ふ渡し。彼若子嬰を殺ふるば。天下愈君の徳を稱して彼ぐ悪を知る。尓ふ五へと勧まば。

沛公之に従ひて降王子嬰を召出し。汝い適に我に降る。一国の地を乞請て身を全ふする心なるか。我此故に恤まで放し扶て置処に項羽い勢を恃て。約に違て関中に王と成んと欲する故。今書を送て汝を求む。汝い美女と珍寶を推へ行て彼に降り。殺を好の心を慰せよ。汝せば彼も喜びて命を扶る事も有ん早く用意して行べしと命ふ子嬰哀哭して我今君の恩を以て存命を得たりしに却て魯公に降りるべ。命を有難からん此時秦の老人も地に拜伏して曰ける。劉沛公い長者の寛仁にて人を愛す。此君を棄何処へ行ん沛公論して宣へ項羽が武勇天下に敵なし。若其命に違ば。忽ち彼に殺されん。汝も早く此に降れ。老人復て曰ける。否降るまじ。降るまじ。不如何方へも逃走て命を全く成べきのみ。子嬰い涙を流し。我り此処を逃るべ咸陽の民悉く害に遇ん事心ぜず。我位に在ること数十日に過ぐれば。恩澤民に潤ひ。今身を逃れて民を害まん忍びざる所なりと。鳴門に向ひ出られば。数十萬の武士公族々と。雲り霞の如くにて。建列ねる剣戟い霜の如くに凛々と。殺氣い天を蔽たり。項羽烏騅の名馬に乗其陣前に進み。子嬰が来ると見居るに。子嬰頭に素練を纏ひ。背に縄を繫ぐも口に款状を含み。地上に洋伏すければ項羽い款状を取上て之を讀しめ聞ける。

始皇之孫。扶蘇之子。三世子嬰上言。伏以秦祚中絶。嬴圖失守。七廟亡祀享之禮。四海蹈塗炭之災大喪人心。遂至尾解玉斧西指。六國従風黄鉞下臨。群兇束手。威令衍不速之命。神武照不殺之恩臣嬰等非敢望祖廟以承宗唯求守墳墓以延日

百口慶再生之福一門沾重見之先早賜生活願
投肝膽湯王存夏后之宗遂成六百之統武王樹
殷紂之后乃開八百之基大王継殷周而王天下
存嬴氏以弘楚亂臣嬰等下情無勝戰慄恐懼之
至

項羽これを聞て子嬰に向て曰けるは汝が祖父は六國と比肩巻く亡して
天下の民を残害せり今其殃汝に帰せり汝何の理ありてか我が説んと
欲するぞ子嬰答て曰けるは六國を滅せしは先祖始皇の所為臣が罪無
有ども大王臣を刑するとも臣聊も恨なし只咸陽の人民は二世の暴に苦
みて一日も安事無りき幸大王関に入民天を目を又仰ぐ只願くは臣を殺
して天下の恨を雪められ民を安じ給へ臣は死すとも生るが如しと言

て未了らざる項羽は忽ち睚眦英布に向て誅せよと云へ英布は
劒を閃して子嬰を刺殺せり斯て程なく須臾の間に愁雲黒霧漫
漫て靄々と成ぬけり秦の人民これを見て哭して哀む其聲は天を動し地を
震ひ沛公有徳萬代為君曾公不仁滅門絶戸と異口同音に
呼れば項羽打聞大きに怒り遺らず殺し盡せと云を范増急に諫
め是は何を宜ふを沛公適に関を入秋毫程も犯ずして法を三章に約
して民の心を懐ら大王は因を施さずして却て子嬰を殺されり又咸陽
の民を殺さば人の心離れ叛きて必ず天下を得ざる項羽聞て曰るは
我天下の諸侯と共に秦の無道を誅するのを子嬰は乃ち秦王なり
如何ぞこれを生おく亦るを百姓聲を揃へ我を罵り辱しむ是皆謀
反する者なり若其侭に棄置べ後禍を成べし范増復て諫るは昔

年魯君の一人の罪なき宮女を殺せしべ國中九年の水旱あり景公怒て宮妃を殺し壺傾く支三里とかゝ只罪無ふ人を殺せば悲惶と化して五穀を害せ古人も嘗て申さゞや一夫恨を啣とれば六月霜と飛へし一婦怨を懷時は三年ゞ間雨降ぎと只今天も朦朧く愁雲黒霧の起りしも罪なき子嬰を所以もなく殺しまゐを上天も哀を成者ゆえん況てや多くの百姓を今罪無ふ殺しまゐ天心ふ逆まえんと理盡て諍時咸陽の民喚び叫び罵る聲猶止ざれば項羽いよ〳〵怒る。英布ふ命じて斬まゐる一族官人八百人百姓四十六百人屍い積て墨々と丘の如く血い流て混々と川を成道行人も絶ふゝ項羽ふ怒猶已ず咸陽城の百姓と男女を分ゞ斬盡せと烈しく英布ふ令まゐるゆゑ范増声を放ちて大ふ哭き哀ミて項羽ゞ馬ふ抱付て爭ひ諫て曰

けるハ成湯の時天ゞ下七年旱續しゝべ民の為ふ悲まれ壇を桑林ふ築て以て自ら天ふ祈まゐ其身を以て犠牲ふ為て已を責られしふ天も感応有しゆゑ遂ふ雨降民喜べり古昔の君ハ斯まゐふ民の為ふハ身を惜まず如斯先例も有りめを今秦の民罪無ふ漫ふ殺しまゐハ上天怒ゝ有べしやと涙を流してかき口説ゞ項羽も少し氣を沈め兵共を引俱して秦の宮居を見まゐしふ高樓層臺玉砌磨紀千門萬戸金を鏤め莊麗曰ん方無れゞ長く嘆ゞて曰けるハ秦の富貴ハ斯迄ゆゑ自ら守る事難ゞ嗚呼可惜々々と云范増項羽ふ向ひゆゑ是帝民を虐て人の諫を聞ざる故ゆえと言烈しく云ケゝ項羽須臾黙然と不言して在けるゞ頓て陣所へ帰りけゝ。

訂正補刻 繪本漢楚軍談初輯巻之八了